

『アーサー・ラザフォード氏の遅すぎる初恋 THE SUMMER VACATION in HAWAII』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

♪ 時広

「うわあ！」

案内された客室からは、美しい海が見えた。バルコニーに向けて解放された大きな窓。そこから潮風が吹きこんでいる。白いレースのカーテンを揺らすそれに頬を煽られ、時広は一瞬だけ目を閉じた。

夢じゃないかと思ってしまう。けれど目を開けてもこの素晴らしい光景は変わっておらず、輝く青い海と七月にしては乾いた風が、ここは日本ではなくハワイだと知らせてくれた。

部屋は六階建てのホテルの最上階だった。暖かな空気と潮風、眩しい太陽。海岸線に並ぶ椰子の木とホテルの敷地内にあるきれいなプールを見下ろし、時広は目を輝かせる。

「アーサー、すごくきれいな眺めだね」

「気に入ってくれたか？」

「もちろんだよ」

振り向いた先で、ここまでスーツケースを運んでくれたベルボーイにアーサーがチップを渡していた。うっかりしていた、と時広は申し訳ない気持ちになる。けれどアーサーに、「ありがとう」と微笑みかけ、ベルボーイにも礼を言った。

生まれ育った日本を出て、アメリカ合衆国のNYで暮らし始めてもう一年以上になるというのに、チップの習慣はまだ身についていない。一人で出かけるときに、チップが必要な場面はほとんどないせいかもしれない。

移動は地下鉄が主だし、外食もしない。ちょっと高級なレストランへ出かけるときは常にアーサーがエスコートしてくれる。もう三十歳にもなったのだからしっかりしなくてはと思うのだが、ウェイターやタクシードライバーにさりげなくチップを渡すアーサーが格好よくて、ついぼろっと眺めているだけになってしまうのだ。

でもここで時広が「いつもごめんなさい」と謝罪してしまうと、アーサーは「それはちがう」と訂正を求めてくる。ここは「ありがとう」と感謝する場面だということだ。時広はアーサーが望むのなら、チップのことだけでなく自分の至らなさを彼がカバーしてくれたときは、「ありがとう」と言うようにしている。たとえ心の中で「またやっちゃった。ごめんなさい」と思ったとしても。

「とても素敵な部屋だね」

アーサーが時広に歩み寄ってきて、軽くハグしながら額にキスをしてくる。

「ホノルルでは一番古いホテルで、百年の歴史があるそうだ。私もハワイは初めてなのでよく知らない。エミーが詳しい同僚からいろいろと聞き取り調査をしてくれて」

ベルボーイが客室を辞していき、二人きりになる。アーサーはTシャツの上に麻のサマージャケットを着て、センタープレスがされた綿のパンツを穿いている。スタイルがいいからなにを着ても似合うのだが、休暇を取ってNYを離れたときはリラックスしているせいか、その柔らかな雰囲気はまたセレブの休日っぽくてカッコいい。

「エミーが情報収集してくれたんだ。じゃあ確実だね」

エミーはアーサーの秘書だ。とても有能な女性で、彼女のおかげでアーサーの仕事が潤滑に回っているという。時広のことまで気遣ってくれる姉のような存在だった。

「私も調べたぞ。エミーのほうをより信用するのか」

「それを言うなら、僕も調べたから。僕だってハワイは初めてなんだからね」

二人で言いあい、ふふふ、と笑う。バルコニーに出て、並んで外を眺めた。時広はアーサーに連れられてNYに行くまで日本を出たことがなかった。ハワイは初めてだ。アーサーもハワイに来たのは初めてだという。ボストンで育ち、NYで働いていたアーサーにとって、南の避寒地といえばフロリダらしい。

アーサーの両親は仕事の大半をアーサーの兄であるエドワードに任せたのち、フロリダに移り住んだとは聞いていたけれど、日本人の時広にとってフロリダはなんとなく遠い地で馴染みはない。

ちょっと調べてみたら、日本からフロリダまでは直行便がなかった。やはり日本人は、国内なら沖縄、近い外国ならグアムかハワイだ。

去年の夏はフィンランドにあるラザフォード家の別荘へ連れていってもらった。静かな森と清々しい空気はとても過ごしやすかった。衝撃的な事件が起こったこともあり、思い出深い土地になった。

別荘の管理人の孫とも仲良くなったので今年もまたフィンランドでもよかったのだが、アーサーの兄であるエドワードが恋人の千紘と別荘を使いたいということだったので、アーサーと時広はちがう場所で休みを過ごそうと決めたのだ。

「ハワイまで一緒に来てくれて、ありがとう」

JFK国際空港からオアフ島のダニエル・K・イノウエ国際空港まで、十時間以上のフライトだった。フロリダなら三時間弱で移動できるのに、今回は時広の希望を呑んでくれた。

「いや、私のほうこそ、トキがバカンスの候補地に挙げてくれなければ、ハワイに来ることはなかっただろう。とてもいい場所だ。ハリーたちが来るのは、明日か？」

「うん、明日だよ」

時広の大学時代からの友人である大智とその恋人のハリーが、夏休みを合わせて取ってくれ、こちらで合流することになっている。電話やインターネット通信で何度も言葉を交わしているが、直接会うのは去年の夏以来だった。会うのが楽しみだ。

「でも、五日間しか滞在できないなんて、慌ただしいよね。アーサーと同じ会社に勤めているのに、NY本社と日本支社では夏休みの期間がぜんぜんちがうなんて、なんか不公平のような気がするんだけど……」

「それについては私も同意見だが……」

アーサーは肩を竦めて苦笑いするだけだ。過去に日本支社の支社長だったとはいえ代理だったし、もう離れて一年以上たつ。余計な口出しはできない——というか、しないのだろう。

大智たちは一週間の夏休みを取ったらしい。アーサーは一カ月だ。時広も一応、働いているが、自分の裁量で休みはどうとでもなるので、アーサーに合わせて一カ月たっぷり夏休みにすることにした。

時広は、NYで知り合った伊藤祐司という日本人と組み、日本人留学生向けの英会話教室を開いている。

去年の十月から手探りで始めたばかりで、まだまだ軌道に乗ったとはいえにくいらいだ。テキストを作ったり場所を借りたりするための資金は、日本で働いていたときの貯金とアーサーからの出資でまかなった。

黒字に転じたのはごく最近だけれど、アーサーが応援してくれているし、ビジネスパートナーの祐司との仲も悪くない。時広自身もやり甲斐を感じているので、未来は明るいと思っている。

「腹は減っていないか？」

「うーん、今のところはまだ」

昼食には遅い時刻だが、夕食にはまだ早い。機内食がまだ胃の中に残っている感じがして、空腹ではなかった。

「アーサーは？」

「私もまだ大丈夫だ」

「じゃあ、ホテルの周辺をちょっと散策しに行く？」

「それもいいが、私はまず君を抱きしめたいな」

優しく微笑まれて、時広はドキッとす。恋人になってからもう二年近くにもなるというのに、いまだにアーサーにドキドキしてしまう。

そっと抱き寄せられて、その逞しい胸に顔を埋めた。嗅ぎ慣れたアーサーの体臭にホッとする自分がある。飛行機の中でずっと隣にいたけれど、当然、こうしたスキンシップはできない。

人目があるうとなかろうとアーサーは気にしない性格だが、時広はダメだ。ゲイであることは周囲に知られてもかまわない、恥ずかしいことをしているわけじゃないと、もう開き直りはしたけれど、それとハグしたりキスしたりする場面を他人に見せるのは別だと思うのだ。

半日ぶりのアーサーのぬくもりに、時広はうっとりした。

「ここならキスしてもいいか？」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>